２０２５年3月

京都新聞社会福祉事業団の活動について

公益財団法人
京都新聞社会福祉事業団

京都新聞社会福祉事業団
設立60周年

本年３月18日（火）に、京都新聞社会福祉事業団はおかげさまで設立６０年を迎えます。１９６５年（昭和４０年）３月１８日に京都・滋賀の地域福祉の増進に寄与するために、京都新聞社が取り組むすべての社会福祉事業を集約し、財団法人として発足いたしました。

当事業団にお寄せいただいた皆さまの温かい善意は、当事業団が取り組む福祉活動の大きな力となっております。

ハンディがありながらも向学心に燃える学生に贈る「愛の奨学金事業」、障害のある人の自立や社会参加を支援する「障害のある人のための事業」、お年寄りの生きがいづくりを応援する「高齢者のための事業」、子育てに悩むお母さんたちの子育てを支援する「子育て応援事業」、福祉施設の活動を支援する「福祉活動支援事業」などの地域福祉の活動に、お預かりした寄付金はすべて大切に役立てさせていただきます。

奨学金事業

◆京都新聞「愛の奨学金」（贈呈式７月／京都新聞文化ホール）　…　５頁

京都、滋賀に生活拠点を置く高校生や大学生、専門学校生らを対象に、返済不要の奨学金を支給しています。家庭の事情で家計が困窮し、教育費用の捻出が困難になり、学業を継続できなくなったり、進学が困難になったりする生徒学生を支援するために、当事業団の発足から６０年間絶やすことなく継続している事業です。

奨学金は、公募の「一般の部」と「交通遺児の部」、公立高校から推薦をいただく「定時制・通信制高校生の部」、「児童養護施設の高校生への奨学激励金」の4部門があり、支給額は、高校生に一人当たり年額９万円、大学生、専門学校生に年額18万円、児童養護施設（京都、滋賀の１７施設）の高校生には奨学激励金３万円を支給しています。

本年度の支給額は、「一般の部」は１８９人に合計２６４６万円、「交通遺児の部」は１２人に合計１６２万円、「定時制・通信制高校制の部」は１０人に合計９０万円、そして「児童養護施設の高校生への奨学激励金」は１４５人に合計４３５万円で、合計３５６人の学生・生徒に総額で３３３３万円を支給しました。

助成・贈呈事業

◆福祉活動支援事業

「京都新聞福祉活動支援」助成（２～３月）… ６頁

京滋の福祉団体を「運営部門」と「設備整備部門」の２部門で幅広く助成

◆障害のある人のための事業

「障害のある人の工賃増へ向けての取り組み」助成（２月～３月） … ６頁

障害ある人の工賃増を目指す福祉施設や作業所の取り組みを助成

「京都新聞夏季キャンプ・レク活動を応援」助成（６～9月）

障害者団体や支援グループのレクリエーション活動を助成

◆高齢者のための事業

在宅高齢者福祉サービス支援「ホームヘルプサービス活動への備品」助成（１２月）

在宅高齢者へのホームヘルプサービスを行う非営利の団体に福祉・介護用品の購入費を助成

「高齢者配食サービス支援」贈呈(１月) … ７頁

一人暮らしの高齢者や高齢者世帯に配食を行うボランティアグループや団体におこめ券を贈呈

「高齢者へのプレゼント」贈呈(２月) … ７頁

特別養護老人ホームへ介助用車いすを贈呈

◆子どものための事業

「児童養護施設の子どもたちのレクリエーション」助成（９月～翌年３月）

京都・滋賀の全児童養護施設へレクリエーション活動を助成

「児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（３月）

中学、高校の卒業とともに京滋の児童養護施設を巣立つ子どもたちに「卒業祝い金」を贈呈

「交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（３月）

交通遺児で小学校、中学、高校を卒業する子どもたちに「卒業祝い」として図書カードを贈呈

◆子育て応援事業

「子育て仲間を応援」助成（６月）

子育て中のお母さん、お父さんの小規模なグループが行う交流会などを助成

「子育て事業助成」助成（６月）… ８頁

子育て支援団体や子育て支援団体が行う事業に助成

==========

催　事

◆障害のある人のための事業

「京都手話フェスティバル」(２月／京都新聞文化ホール) … ９頁

手話の普及と発展を目指す、手話スピーチコンテストと手話アトラクション

「シンポジウム障害のある人の就労支援」(２月／京都新聞文化ホール) … １０頁

障害がある人の就労支援を考えるシンポジウム

「みんなで海釣り-障害のある人の体験講座」 … １１頁

(９月／１泊2日・宮津市 京都府立海洋高等学校 桟橋)

障害のある人の余暇活動の支援を目的に、宮津市内で１泊2日で障

害者、介助者約50人とボランティア約120人が参加。神戸新聞厚生事業団と共同事業。

「京都新聞おでかけ公演・障害者団体」（２月～３月で2カ所）

障害者施設へ演奏家らを派遣する出張型事業

◆高齢者のための事業

「京都新聞おでかけ公演・高齢者団体」（２月～３月で２カ所）… ７頁

高齢者施設へ演奏家らを派遣する出張型事業

◆子どものための事業

「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都／in 滋賀」（８月）

京都・滋賀で人形劇などの公演を開催、子どもたちを招待する

◆福祉啓発事業

「京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞」… １２頁

（贈呈式１月／京都新聞文化ホール）

京滋で地域福祉の向上に著しい功績のあった個人または、団体を顕彰する「京都新聞福祉賞」と、今後の活動が期待できる活動歴が浅い、または若い世代の個人や団体を顕彰する「京都新聞福祉奨励賞」を実施

「京都新聞ともに生きるフォーラム」… １３頁

（11月／京都新聞文化ホール）

当事業団のメインテーマである「ともに生きる」を事業名として、一人一人の命を大切にし、みんなが助け合って生きる社会について考えるフォーラム。京都新聞朝刊「福祉のページ」のコラム執筆者が講演を行う

◆障害者スポーツ事業

多岐にわたる障害者のためのスポーツ事業に取り組んでいます。

全京都障害者総合スポーツ大会（６～１０月／京都府内各地）

7競技=卓球バレー・卓球・水泳・陸上競技・アーチェリー・フライングディスク・ボッチャ

全京都車いす駅伝競走大会・ミニ駅伝競走大会

（９月／京都府立丹波自然公園）

天皇杯 全国車いす駅伝競走大会

（３月／国立京都国際会館前ーたけびしスタジアム京都）

京都ゆとりスポーツの集い（５月／山科区 勧修寺運動公園）

パラアーティスティックスイミングフェスティバル

（１０月／京都市障害者スポーツセンター） ほか

私たち、京都新聞社会福祉事業団は「ともに生きる」をテーマに、これからも助け合う社会づくりを目指して活動を続けてまいります。

今後もお一人でも多くの方に支援が行き渡りますように、寄付金を広く呼びかけて、困っている人が安心して暮らしていける地域社会を目指して、邁進していく所存でございます。

２０２４年１０月１日（火）に当事業団のホームページ、モバイルサイトを一新しました。「活動レポート」欄で、当事業団の地域福祉活動の詳細をお伝えしていますので、ぜひご覧ください。SNS（X）のアカウント開設、電子決済による寄付受付も同時にスタートしました。

ホームページ
が新しくなりました

X公式アカウントを
フォローしよう

電子決済による
寄付受付をはじめました

２０２４年度 京都新聞「愛の奨学金」贈呈式
（２０２４年７月２２日付 京都新聞朝刊）

◆ 京都新聞愛の奨学金を贈呈 ◆

目標や夢へ 善意の後押し
他者の存在気付ける大人に

学生・生徒356人に3333万円

京都新聞社会福祉事業団の2024年度「京都新聞愛の奨学金」贈呈式が6日、京都市中京区の京都新聞社で行われ、物価高騰など厳しい経済状況下、将来への目標と希望を抱いて学ぶ京都府と滋賀県内の学生・生徒合計356人に総額3333万円が贈られた。

内訳は、公募一般の部で高校生84人、大学生・専門学校生105人、交通遺児の部で高校生6人と大学生6人、公立高が推薦した定時制・通信制の部で10人。19日には奨学激励金を児童養護施設の高校生145人に贈った。

大藪俊志・佛教大社会学部教授、伊住公一朗・京都青年会議所理事長、横江美佐子・京都市南青少年活動センター所長の選考委員3人が成績に加え、作文などで将来への思いや現在の学業に対する意欲をくみ選んだ。

一般の部には高校生176人と大学生・専門学校生224人、計400人から申請があった。ひとり親家庭が半数を超え、物価高、親の失業、家族の病気入院など困難な事情を申請理由にあげた。

贈呈式では代表の生徒（右）に白石真古人常務理事から奨学金が手渡された（6日、京都市中京区の京都新聞社）

贈呈式は2回に分けて開かれ、白石真古人常務理事と選考委員が代表生徒に奨学金を手渡した。常務理事は奨学金の趣旨や選考の経過などを説明。多くの寄付者からの言葉も引用し、「その思いをしっかりと受け止め、奨学金を大切に使ってください」と話した。大藪選考委員長と横江委員も「作文を通じ、皆さんが将来の夢や希望を持ち、日々の勉学や部活動に励まれていることを知りました。奨学金を有意義に活用し、他者の存在に気付けるような大人になってください」と激励した。

同奨学金は、事業団が発足した1965年以来続いている。誕生日にちなみ、年齢に100円をかけて寄付をする本紙の「誕生日おめでとう」コーナーへの寄付や、奨学金事業協賛寄付金、交通遺児のための寄付金などを加えて支給している。高校生は年額9万円、大学生・専門学校生は同18万円が返済不要で給付される。奨学激励金は3万円が贈られた。

困っている学生のためにと20年度から1千万円以上の寄付を続けている左京区の匿名女性から今年度も、1千万円の寄付があり累計6千万円となった。山科区の女性からの寄付500万円など、無償の善意が続いている。

贈呈式では、京都市内の男子学生は「4年生の今年は卒業論文準備の資金に奨学金を充てたい」と考えていたが、将来は高校教員をめざすとの目標を踏まえ、「社会に出ても常に謙虚に、感謝の心を忘れず、こうした支援も、次世代に返していけたら」と謝辞を述べた。

滋賀県内の医科大学で学ぶ女子学生は地域医療に関心を持ち、勉学や課外活動に励んでいる。しかし、授業やテスト勉強が忙しく、夏休みなども実習や課外活動でアルバイトの時間が十分にとれない。奨学金にはこれまで「教科書代や病院見学の費用に充てることができ、学習に集中する大きな支えとなっている」と感謝してきた。贈呈式の謝辞では「寄付者の期待に応え、医師になり、誰かを助け、応援し、社会に恩返ししたい」と話した。

障害のある人の工賃増へ向けての取り組み助成
京都新聞福祉活動支援助成
（２０２４年４月１日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる　京都新聞社会福祉事業団だより

京滋46団体に745万円助成

福祉活動支援や賃金増へ向けての取り組み

京都新聞社会福祉事業団は、2023年度の「京都新聞福祉活動支援」と障害のある人の「工賃増へ向けての取り組み助成」両事業の贈呈式をこのほど、京都市中京区の京都新聞社で行った＝写真。京都、滋賀両府県の福祉施設やボランティアグループなど46団体に総額745万円を助成した。

福祉活動支援は、運営、設備両部門で団体や施設に助成している。本年度は運営23団体（申請29団体）、設備10団体（同15団体）に計500万円を助成。高齢者や難病患者の支援、ひきこもりの若者の自立支援を行う団体などの活動費や障害者施設での送迎車両購入費の一部、視覚障害のある人向けの音訳ボランティアグループの機材購入などを支援した。

工賃増助成は、障害のある人の賃金増につながる経済活動を支援しており、本年度は13団体（申請20団体）に計245万円を助成。消防ホースをアップサイクルし製品化するためのミシンやドリップパックのコーヒーを増産するための機材の購入、新商品の菓子製作のための電気乾燥機の購入などを支援した。

助成団体は次の通り。

◇京都新聞福祉活動支援

【運営部門】

障碍者芸術推進研究機構（京都市北区）、お客様がいらっしゃいました（下京区）、京都府網膜色素変性症協会（中京区）、子ども会・少年団を育てる左京センター（左京区）、ハンド&ネイルケアボランティアチームガンチー（同）、i－care kids京都（同）、内部被曝から子どもを守る会・関西（同）、助けあいグループりぼん（東山区）、チャイルドライン京都（山科区）、きょうとWAKUWAKU座（右京区）、京都YMCA長岡こおろぎ（西京区）、ジョイント西京視覚障害者ボランティア（同）、西京少年補導委員会（同）、東九条地域活性化センター（南区）、京よりそい（宇治市）、『くらしの応援隊』ボランティアの会（長岡京市）、パーキンソン病支援センター（八幡市）、のびのび倶楽部（京都府久御山町）、京丹波町社会福祉協議会（京丹波町）、全国ギャンブル依存症家族の会京都（京都府内）、音と花と人と（大津市）、子ども食堂スマイルシード（同）、若者自立支援ボランティアGroup居場所の会（レリーフ）（守山市）

【設備部門】

京都犯罪被害者支援センター（京都市上京区）、京都YWCA（同）、京都手をつなぐ育成会山科工房（山科区）、洛西寮朗読ボランティアサークル（西京区）、西京視覚障害者協会（同）、オープンスペース祐の風（同）、朗読ライブボランティア『拍子木の会』（長岡京市）、あしたばの家（八幡市）、はた楽きの里子ども食堂わいがやキッチン（大津市）、今津ふくしの会（高島市）

◇工賃増へ向けての取り組み助成

就労継続支援B型事業所サリュ（京都市上京区）、プティパ（下京区）、障がい福祉サービス事業所成望館（南区）、エルファ共同作業所（同）、飛鳥井ワークセンター（左京区）、楽々堂（同）、加音西京極作業所（右京区）、いかるがの郷（綾部市）、ワークショップ野の花（城陽市）、暮らしランプ・なかの邸（長岡京市）、アシストセンターネール（京田辺市）、おーぷんせきみ（京都府精華町）、ウッディ伊香立（大津市）

高齢者配食サービス支援（２０２５年２月１１日付　京都新聞朝刊）

事業団だより

配食ボランティア

32団体におこめ券贈る

京都新聞社会福祉事業団は、１人暮らしのお年寄りや高齢者世帯に食事を届けている京都・滋賀の配食ボランティア32団体に計2700食分の「おこめ券」を贈呈した。

毎年、高齢者事業寄付金や歳末ふれあい募金の一部をもとに実施。本年度は京都市内５、京都府内12、滋賀県内15の計32団体に419キロ分（高齢者１人当たり１食150グラム相当）のおこめ券を配食に役立ててもらう。

京都市北区の京都生協「くらしの助け合いの会」配食グループは６日、同区のきぬがさ会館で12人がおこめ券で購入した米を炊き上げ、サバの塩焼きやだし巻き、ホウレンソウとシメジのかつお和え、だんごいちごジャムのせなどを添えた弁当110食＝写真＝を、１人暮らしの高齢者らに届けた。

同会は生協の組合員がボランティアで活動し、配食グループは週１回、高齢者の見守りを兼ねた配食活動を行っている。代表の東山敏子さん(85)は「お米が値上がりしている中での支援はとても助かります」と話した。

高齢者へプレゼント（２０２５年３月１１日付　京都新聞朝刊）

事業団だより

京滋の特養へ車いす贈る

計7台、メリハリある生活後押し

京都新聞社会福祉事業団は、「高齢者へのプレゼント事業」として京都府、滋賀県内の特別養護老人ホーム７施設に介助用車いすを各１台贈呈した＝写真。2008年度から毎年実施し、贈呈数は299台となった。

企業や団体からの本紙「記念日おめでとうコーナー」や高齢者事業協賛寄付金などを原資にしている。

背もたれと座面角度が調整できるティルト・リクライニング介助型と、ひじ置きと脚部が動かせる多機能介助型の２種類から選択。

特別養護老人ホームすばる醍醐（京都市伏見区）は前者を選び、白石真古人・同事業団常務理事が入居者の試乗に寄り添った。吉野鍾八施設長（59）は「離床機会が増え、座位保持が困難な方にもメリハリのある生活をしてもらえる。不足していたので助かります」と話した。

他の贈呈先は次の通り。

鳥羽ホーム（南区）、まどかⅡ番館（伏見区）、マ・ルート（宮津市）、南天（大津市）、あじさいの郷（長浜市）、えんゆうの郷（草津市）

京都新聞おでかけ公演（２０２４年３月２５日付　京都新聞朝刊）

事業団だより

京フィルデュオの音色響く

5年ぶり「おでかけ公演」

京都新聞社会福祉事業団主催の「おでかけ公演」が、守山市の滋賀県障害児協会・湖南ホームタウンでこのほど行われた＝写真。

京都府、滋賀県内の障害のある人や高齢者の福祉施設や団体、つどいを訪ね、演奏会などの催しをプレゼントし、楽しいひとときを過ごしてもらおうと、2006年度から実施している。本年度が５年ぶりの開催となり、障害のある人と高齢者を対象に各２団体で行う。

公演は、京都フィルハーモニー室内合奏団に所属する森本真裕美さん（バイオリン）と田中裕美子さん（ファゴット）が出演し、トークやデュオ演奏を披露。クラシック音楽や日本の歌メドレーなど12曲を演奏した。同タウンを利用する約35人が、曲に合わせて手拍子し、体でリズムをとって楽しんだ。

生活支援員の島林育子さん（28）は「皆さんと一緒にコンサートへ行く機会があまりないので、今回の公演を楽しみにしていました」と話していた。

子育て仲間を応援助成・子育て事業助成
（２０２４年５月１４日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 子育て応援事業 ◆

京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県で工夫を凝らして子育てに取り組むグループに一律2万円を助成する「子育て仲間を応援」と、上限15万円でイベントなどを支援する「子育て事業助成」を毎年行っている。2023年度に支援した活動例を紹介する。

京都府京丹波町の絵本サークル「きいろいばけつ」は、結成20周年記念イベントに亀岡市在住の絵本作家北川チハルさんを招いて11月に地元の和知ふれあいセンターで「絵本トークライブ」を開いた。同サークルは普段から和知小や「わちこども園」などで読み聞かせや、同センターでお話会「えほんはともだち」などを開いている。

11月のイベントには乳幼児から小学生の親子約60人が参加。子どもらは同センターのアリーナに敷いたマットに座り、大型プロジェクターも使って展開された絵本トークに夢中で聞き入った。代表の藤本英子さん（57）は「事業助成金10万円を含めた予算で、講師を招き、絵本を効果的に展示する面展台も製作できて役立った」と話している。

絵本作家トーク盛況

シャボン玉催し手応え

無数のシャボン玉や、とびきり大きなシャボン玉などを皆で飛ばし楽しんだ（2023年11月、滋賀県日野町）＝提供写真

滋賀県日野町の必佐地区社会福祉協議会のボランティアグループ「子育てひろば」は11月、草津市に住むシャボン玉のパフォーマーによる「シャボン玉ショー」を地区内の内池公園で開いた。同グループは毎月2回、必佐公民館などで、未就園児と保護者ら十数組が、大型遊具で遊んだり、ハロウィンパーティーやクリスマスパーティーなど季節のイベントを行い、子ども同士の触れ合いや、保護者の情報交換・相談の場としている。

メンバーの一人、中西眞弓さん（63）は「事業助成に自己資金を加え、人数制限もせず、普段よりも広い地域からの参加があり、大規模にシャボン玉イベントができて、皆で飛ばして楽しめました。近所のお年寄りや通りすがりの人も集まり、写真を撮るなど盛り上がった。その後の『子育てひろば』への参加者増にもつながったかな」と助成の効用を感じている。

小規模運営の継続後押しも

「仲間を応援」助成を受けた京都市右京区の「わたぼうし文庫」は、後藤由美子さん（70）の家を拠点に4人で運営。幼児から小学生の親子を対象に、本の読み聞かせや手作り工作などを毎月行っている。「コロナ禍」もほぼ終息した23年度は室内開催もでき、季節にちなんだ桜もち、フルーツ寒天、月見団子、クリスマスクッキーなどおやつ作りも楽しんだ。手作り工作では、凧の絵をかいて組み立てたり折り紙などもした。後藤さんは「小規模運営だが、継続には補助金が後押しになる」と言う。

同じく「仲間を応援」助成を受けた「ゆらんこおもちゃライブラリー」は、西京区の西京児童館2階で田畑昌子さん（65）らボランティアが月に2回開いている。未就園児と母親らが対象で、木のおもちゃで遊び、夏にはうちわ、節分には鬼の面作り、折り紙なども楽しむ活動を続けている。

23年度は「子育て仲間を応援」で82団体（京都市内12、府内37、滋賀県内33）に総額164万円を、「子育て事業助成」で計13事業（市内4、府内3、県内6）に総額83万5千円を助成した。

24年度の「子育て事業助成」と「子育て仲間を応援」の申請は5月31日まで受け付けている。

京都手話フェスティバル
（２０２５年３月１７日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆第20回京都手話フェスティバル◆

笑顔で妻に「オハヨー」
手話で語り合う朝

「未来」テーマにスピーチ、交流

聴覚障害者問題への関心を高め、手話スピーチで生き生きと語る機会として「京都手話フェスティバル」が2月23日、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。第20回という節目を記念して特別賞が贈られ、海外でも公演した「ホワイトハンドコーラスNIPPON京都チーム」が元気いっぱいにパフォーマンスを披露した。

京都府聴覚障害者協会と京都新聞社会福祉事業団が主催した。

一般の部にはサークルや地域団体などで手話を学ぶ11組、高校生の部には3人が「未来に向けて」などのテーマに沿って、子どもの部は自由テーマで8人が手話でスピーチした。

一般の部で最優秀賞に選ばれたのは英語講師下田奈都子さんだった。英語教室でのコーダと呼ばれるろう者の母をもつ生徒が体験レッスンを1人で受けたエピソードがきっかけで手話を学ぶようになったという下田さんは「私の教室にろう者のお母さんとコーダの子が来たら、全部手話で説明をしたい。お母さんと直接話したい」と目標を語った。

難聴の夫婦ともに手話を習っているという88歳の小野昌宥さんは特別賞に輝いた。「朝起きて笑顔でオハヨーと手話で声をかけます。100歳まで元気で習い、いつまでも手話を使って夫婦がなかよくともに暮らしていきたい」とスピーチすると客席からひときわ大きな拍手がわいた。

高校生の部で最優秀賞に選ばれた京都八幡高の山下心優さんは、ボランティア活動で子どもと接した体験にもとづいて「将来は作業療法士になり、障害のある人が少しでもすごしやすい環境づくりをしたい」と夢を伝えた。

上審査員の林丘寺副住職の天野弘堂さんから特別賞が小野昌宥さんに贈られた（京都市中京区・京都新聞文化ホール）
下豊かな表現でパフォーマンスしたホワイトハンドコーラスNIPPON京都チーム

一般の部と高校生の部では他にも次の皆さんが入賞した。

【一般】優秀賞　荻野志穂▽京都新聞社会福祉事業団賞　山花晴喜【高校生】優秀賞　長井優奈。子どもの部の8人には記念品が贈られた。

審査委員長の吉田航・京都府聴覚障害者協会会長は「テーマの『未来』からとても元気をもらった」と講評したうえで、特別賞について「100歳までがんばるという小野さんに負けない気持ちを私たちも抱き続けたい」と敬意をこめてたたえた。

アトラクションで登場したホワイトハンドコーラスNIPPON京都チームは、障害のある子もない子も参加する。手話言語をベースに表現する「サイン隊」と合唱の「声隊」が、北区の寺院や京都女子大を拠点に練習している。発表の機会は京都市など国内にとどまらず、オーストリアの首都ウィーンで公演したこともある。

この日は「だれにだってお誕生日」「花は咲く」などのレパートリーを、時には客席まで降り立つパフォーマンスや明るく豊かな表情、手や体全体の動きを交えて表現した。

シンポジウム障害のある人の就労支援
（２０２５年３月１１日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

シンポジウム「障害のある人の就労支援」

障害のある人の就労支援を考えるシンポジウム（京都新聞社会福祉事業団主催）が2月16日、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。障害者雇用をすすめる地元企業の経営者や働く当事者、サポートするネットワーク関係者らが講演し、取り組みが紹介された。家族や支援者も含め約１１０人が参加、雇用を前にした職場実習の重要さなど環境整備や支援機関との連携、現状での課題についても認識を深めた。

初めに白石真古人・同事業団常務理事が「このシンポは、障害者が地域の中でいきいきと働き、普通に暮らしていける『共生社会』の実現を目指して15年前から開催している」とあいさつした。

講演1部では、京都中小企業家同友会理事で、自らも重度と軽度の知的障害のある双子の高校生を持つ芳賀久和氏が、その立場を踏まえ、「障害者雇用における中小企業と地域との連携」の題で、雇用や家族支援に取り組んできた経験や思いを話した。

参加者からの質問に答える講師の（左から）芳賀さん、渡邉さん、当事者の３人（２月16日、京都市中京区）

職場全体の離職率低下
会社、同僚と合うかどうか

芳賀さんは「同友会は人を企業や地域の中で生かしていくことを考えている。働きにくさを抱えている人たちの働きたいという思い、意欲をしっかりと応援していきたい」と話し、具体的な事例も紹介。障害者雇用では「雇用した人とのコミュニケーション力が向上し、職場全体の離職率が低下した」などの効用もあげた。

２部では職場実習や雇用を積極的に行っている清掃・ビルメンテナンス会社を経営する渡邉真規氏と同社で働く当事者が、職場体験・実習の必要性や経験、環境整備などをテーマに話した。

昨春高校を卒業して清掃作業に従事する当事者は、午前6時半や7時に仕事の現場に入るには4時半、5時に起きることもあるが、働いたお金で趣味の爬虫類や魚類を買い飼育を楽しんでいるという。「週一回の定期清掃は手順を覚えるのが大変だった。働く場では厳しいこともあるので、施設にいたほうが幸せではないかと悩んだこともあった」が「仕事を通してできることが増えてきた。30歳ぐらいには頼られる人になりたい」と意欲的に話した。

雇用前の体験・実習の必要性を認識

また職場実習については「職場の人が親身になってくれているのを感じた」と振り返った。実習に関して、終盤の質疑応答で芳賀さんは「企業と当事者をマッチングする場合、雇用を求めているのか、体験しに来ているのかを職場側が見極めることも大切」と言い、渡邉さんは「採用の時には、働く能力というよりも会社に合うかどうか、他の同僚と合うかどうかを考えることが大切」と指摘した。

さらに渡邉さんは「障害者の能力を生かせる職場とはどういうものか。重度障害者の幸せな社会とは何か。働く事例を増やしていくことで認識を変えていくことが必要では」「企業からのニーズがどれだけあるかわからないが、まず環境整備が必要。労働力がひっ迫している状況は、障害者などいろんな人が働くチャンスでもあるととらえている」と続けた。当事者は最後に「社会では障害者として見られることが多いが、可能性のある人と見てほしい。本人の自己肯定感にもつながる」と締めくくった。（ライター　山本雅章）

みんなで海釣り-障害のある人の体験講座
（２０２４年９月２３日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

みんなで海釣り―障害のある人の体験講座

3府県から170人超参加
桟橋でトライ、大物に歓声

海洋高生手助け、交流にぎやか

障害のある人たちの余暇活動として開いている「みんなで海釣り―障害のある人の体験講座」（主催・京都新聞社会福祉事業団、神戸新聞厚生事業団）が今年も7、8の両日、宮津市であった。京都、滋賀、兵庫の3府県から介助者と合わせて52人が参加、ボランティアら124人も加わった。府立海洋高校桟橋では、50㌢級のチヌに歓声があがるなど、にぎやかに大小の魚を釣り上げ、交流を楽しんだ。

1998年から毎年開かれており、コロナ禍の中断後に昨年再開された。

7日は、府立青少年海洋センター・マリーンピアで開講式が開かれ、海洋高生の講座「海のふしぎについて」もあった。19人の生徒4グループが岩ガキ養殖やプラスチックごみによる海洋汚染、海の環境保護などについて発表した。岩ガキ養殖では、エサもいらず水質を改善するなどのメリットの一方、成長には4、5年はかかることや海から揚げて殻まできれいにするには手間がかかるなどの点も伝え、味が良いことを強調した。ヒレに毒があるアイゴも調理の工夫で美味になると発表された。夜には、釣り方や危険な魚の見分け方、救命具のつけ方を学んだ。

8日朝には海洋高で約70人の同高生・教職員やボランティアらが迎えた。参加者は、夏のような日差しの桟橋で魚釣りに挑戦し、ハタやカマスなどを釣り上げた。同高生と京都府磯釣連合会や釣り愛好団体の会員らは、釣り針にエサをつけたり釣った魚を網ですくうなど手助けをした。

京都市伏見区から6回目参加の山本勇太さん（19）・新一さん（55）親子は「今日はまだ釣れんけど、小学生で初参加した時に大漁だったんで、再現を狙ってよく参加します」と糸を垂らした。

車いすで釣りざおを握る「みんなで海釣り―障害のある人の体験講座」の参加者（宮津市・府立海洋高校桟橋）

釣り針にエサをつけたり釣った魚を網ですくうなど海洋高生も手助けした

左京区の畑田めぐみさん（58）は初参加。今回で15、16回目の参加という夫の弘呂志さん（64）は「釣りは自分でも行くけど、この講座はいろんな人との交流が楽しい」とし、「今日は全然釣れんなあ」と言いつつ満足顔。上京区の山岸秀夏さん（18）に付き添った母親の文子さん（42）は昨年に続いて2回目の参加。「子どもと同年配の高校生とふれあえるのも楽しい。昨年は初めてで釣れなかったけど、今年はリベンジ」と話し、高校生と一緒にアジやカワハギを釣り上げ「たくさん釣れれば家でおかずに」と笑顔を見せた。

右京区から初参加の近藤聖一さん（79）は脳梗塞の後遺症や心臓に不安があり、「以前は大阪湾などにも行ったが病気もあって機会がない。久しぶりの釣りは海も周囲の山の緑もきれいで、気が安らぐ」と釣りざおを握った。

兵庫県三田市の依藤準平さん（42）は、翔太さん（8）を連れ「普段は釣りの機会がなく、昨年初参加し面白かった」と楽しんだ。表彰式では計量と採寸結果に従い上位入賞者に釣りざおなどの賞品が贈られた。

主な協力団体は次の通り。

【後援】京都府、宮津市、宮津市社会福祉協議会、KBS京都【協力】日本釣振興会近畿地区支部・京都府支部、全日本釣り団体協議会、京都府磯釣連合会、MFG、GFG、京都府漁業協同組合、訪問看護ステーションふぉすたあ伏見【協賛】アサヒフーズ、がまかつ、東レ・モノフィラメント、ハヤブサ、マルキュー、マルゴ

京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞 贈呈式

（２０２５年１月２７日付 京都新聞朝刊）

「愛の手で子ら支える」

京都新聞福祉・奨励賞贈呈式

社会福祉の向上に著しい功績のあった個人や団体をたたえる「京都新聞福祉賞」と、福祉の各分野において将来のリーダーとしての活躍を期待する「京都新聞福祉奨励賞」の贈呈式が27日、京都市中京区の京都新聞文化ホールであった。福祉賞に1氏1団体、奨励賞に3団体が選ばれた。

京都新聞福祉賞を受賞した篠澤さん（左）
＝京都市中京区・京都新聞文化ホール　撮影・安達雅文

1965年に「京都新聞社会福祉功労者表彰」として始まり、主催は京都新聞社会福祉事業団と、今年から新たに京都新聞も加わった。

福祉賞を受賞したのは、共働きやひとり親家庭、生活保護世帯などの子ども支援に携わる花園教会水族館館長で、「NCMジャパン」京都事務所代表の篠澤俊一郎さん（44）＝右京区＝と、24時間体制で孤独や不安を抱える相談者への傾聴に長年取り組む「京都いのちの電話」（京都市内）。福祉奨励賞は、レモネード販売を通して小児がん患者を支援する「レモネードスタンドPhillia」（上京区）、ひきこもりや就労の課題解決への支援に当たる「コミュニティ・スペースsacula」（西京区）、不登校の児童・生徒が安心して過ごせる居場所づくりに尽力する「Reframe」（中京区）に贈られた。

式では、同事業団理事長の大西祐資・京都新聞社長が「強い使命感を持って地域福祉を支え、優しいまなざしで多くの人々に夢と希望を与えていただいた」と述べ、賞状を手渡した。

受賞スピーチで篠澤さんは、子どもの支援は1年や2年では結果が見えず苦悩もあったと振り返り、「大学生や社会人へと成長していく姿を見ると、彼らの人生に少しでも寄り添えることができたと誇りに思う。これからも子どもたちに少しでも愛の手を差し伸べることができるよう活動していく」と力を込めた。（清原稔也）

京都新聞ともに生きるフォーラム
（２０２４年1月１５日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

●●● ともに生きるフォーラム ●●●

遺贈は額より思い重視

老いは「生ふ」、成熟示す

自己以外の存在の尊重が必要

京都新聞社会福祉事業団は昨年末に京都市中京区の京都新聞文化ホールで、命を尊び共に助け合って生きる社会のあり方を考える「ともに生きるフォーラム」を開いた。同紙朝刊「福祉のページ」のコラム「暖流」を今春から執筆する予定の平等院（宇治市）住職・神居文彰さんら2人がそれぞれの分野から人生の心構えなどについて話し、市民約百人が熱心に耳を傾けた。

三井住友信託銀行京都支店財務コンサルタントの土谷紀久さんは「自分の生きた証を社会貢献に～遺贈による寄付のメリット・留意点と具体例～」と題して講演。土谷さんは、生前の寄付や遺贈（遺言による寄付）、相続財産の寄付の特徴や違いを説明したうえで、遺贈のメリットについて「自分の生活資金を気にすることなく、残った余剰財産から寄付出来る。自らの思いを遺言書にかくことも可能」などとした。

また「遺言は元気なうちに作成しましょう」とアドバイス。NPO法人に遺贈された財産は相続税の課税対象外になることや、不動産を遺贈する場合には譲渡所得として所得税が課税されるケースもあることなど、税制面での注意点も具体的に分かりやすく説明した。遺贈について「高額である必要はない。思いを実現することが大切だ」と話し、遺言については「その人を信じて、その人に託す」ことが重要だと締めくくった。

神居さんは「命の尊さ・共生を考える」との題で講演。平等院の風景や文化財、仏像などを多数のスライド写真で紹介しながら多様なイメージを提示。「命は有限である」と前置きして「今この時間を大切に」と直言。「生まれた時から人は一人ではない」とし、「人と人との結びつきの追認体験も必要だ」「どのような結びつきを持つかということは、縁ということ」と仏教的な知恵も披露した。

「個では生きられないのだから、自己以外の存在の尊重が必要」とも述べ、宗教者としての立場から「キリスト教は啓示の宗教と言われるが、対比するなら仏教は気づきの宗教」と指摘。平等院や寺の借景を例に「自己の所有を越えたものを美しいと感じる心の暗喩だ」とも話し、「人はできないことばかり、間違うことばかりだが、そういった人間とともに生きていくことが大切」と説いた。

「老いは『生(お)ふ』であり、人としての成熟だという考えもある」「成熟とは温かみを持った時で、人は大人になる」。また「人と人との垣根を取りはらった時に成熟したともいえる」とも述懐した。

宇治市の生活介護事業所「宇治作業所のぴのび」（社会福祉法人宇治東福祉会運営）が同事業団の助成金で購入した業務用ミキサーを活用して商品化したユニークな焼き菓子「おからスコーン」と黒糖クッキーが、参加者に土産として配られた。

（左）遺贈による寄付のメリットなどを具体例で説明した土谷紀久さん
（右）「個では生きられないのだから、自己以外の存在の尊重が必要」などと話した神居文彰さん（いずれも2023年12月16日、京都市中京区の京都新聞文化ホール）

（２０２４年３月２５日付 京都新聞朝刊）

●●● 京都新聞社会福祉事業団 ●●●

書家・杭迫柏樹さん
「ともに生きる」揮毫

京都新聞社会福祉事業団が来年度に迎える設立60周年に合わせ、活動理念「ともに生きる」の書を、書家杭迫柏樹さん（89）が揮毫した。「自然体の境地でしたためた。理想の社会像に通じるすばらしいメッセージだ」と共感の思いをこめたという。

京都新聞社会福祉事業団は、京都新聞社の福祉事業部門を独立させて1965年3月に発足した。一人一人の命を大切にみんなが助け合って生きる社会を目指す理念のシンボルとして、京都府と滋賀県で行う福祉事業や募金の呼び掛けなどさまざまな場で「ともに生同事業団設立60周年を機に杭迫さんに揮毫を依頼した。

日展内閣総理大臣賞や日本芸術院賞を受賞し、日展名誉特別会員の杭迫さんは、京都新聞と京都新聞社会福祉事業団が主催のチャリティー美術作品展にも書を寄贈してきた。

京都市伏見区の自宅で、早朝から筆を手にする。「ともに生きる」

力強く筆を走らせる杭迫さん（京都市伏見区）＝撮影・奥村清人

「理想の社会表す言葉、自然体の境地で」

「ともに生きる」というメッセージへの共感を語る杭迫さん

の揮毫について杭迫さんは、70～80枚の中から選んだ書を壁に貼って3日間見比べた。そのうえで「無理と無駄がない、最も自然体で書けた」。そう判断した書き出しの数枚から選んだという。

自ら歩んできた表現の道に関して「若い時はさまざまな工夫を試みて右往左往し、壮年期には鋭く個性を研ぎ澄まして峻険さを増す。経験を重ねた先にようやく、そのどちらでもない自然体の境地にたどりつく」としながらも「若年と壮年時の経験は決して無駄ではない。成熟に至るまでに必要な積み重ねだ」と語る。

そのことは、ともに生きるというメッセージと重なる。「生まれたばかりの子から青壮老年の各世代、さまざまな職業、すこやかな人やハンディがある人…すべての人々がともにあらんとする理念を象徴する言葉だ」

「卒寿記念 杭迫柏樹の世界展」は、11月19日から24日に京都文化博物館6階（中京区）で催される。自身の集大成として「意気を新たにすべし」と年頭に誓っ

◆京都新聞チャリティー美術作品展

２０２４年度は、京都新聞社会福祉事業団 設立６０周年「第４２回京都新聞チャリティー美術作品展」を２０２４年１２月１８日（水）～２３日（月）まで、京都高島屋S.C.（百貨店）７階グランドホールで開催しました。来場者は４６３０人、入札件数は２９７０票の応札をいただきました。京都新聞チャリティー美術作品展での寄付収入（落札金）は、当事業団が取り組む「愛の奨学金」事業をはじめ、障害のある人や高齢者、子どもたちのための助成・贈呈事業や、福祉団体に助成を行う福祉活動支援事業、地域福祉の向上に功績があった個人、団体を顕彰する「京都新聞福祉賞・福祉奨励賞」褒章事業などの大きな力となっております。

（２０２４年１２月１９日付 京都新聞朝刊）

下京・京都新聞チャリティー展

美術作品で福祉充実へ

著名作家や文化人寄贈

全国の著名な美術家や宗教家、文化人から寄贈された作品を福祉の充実に役立てる「京都新聞チャリティー美術作品展」が18日、京都市下京区の京都高島屋で始まった。

京都新聞社会福祉事業団と京都新聞の主催で42回目。重要無形文化財保持者や文化功労者、日本芸術院会員ら861人から寄せられた千点を超える作品を展示する。

各界で活躍する作家や文化人から寄せられたチャリティー作品が並ぶ会場（京都市下京区・京都高島屋）

会場には、日本画家千住博さん、洋画家大津英敏さん、陶芸家伊勢﨑淳さん、漫画家ちばてつやさんら、各界で活躍する人たちの作品がずらりと並ぶ。将棋の羽生善治さんの書や、横綱照ノ富士関ら現役力士の手形の色紙などもある。

入札で購入者を募る方法で、収益は障害者や高齢者、子どもへの支援事業、援助が必要な学生への奨学金などに役立てられる。23日まで。（清原稔也）

（２０２４年１２月１６日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

チャリティー美術作品展 18日から京都高島屋

「京都新聞社会福祉事業団設立60周年　第42回京都新聞チャリティー美術作品展」（同事業団・京都新聞主催）が18日から京都市下京区の京都高島屋で開かれる。美術作家や宗教家らの協力で1983年から続いている。今回も陶芸、工芸、彫刻、洋画、版画、日本画、書など1000点を超える寄贈があった。

切れ長の目の美人画で知られる画家鶴田一郎さんは、京都市に創作の拠点を構えて10年になる。

化粧品会社ノエビアの広告をはじめミュージシャンのアルバムジャケットなども手がけてきた。

「伝統文化と革新を感じる地」という理由で京都を選んだ。仏画や琳派作品のエッセンスを取り入れるなど作風を広げ、寺院でも作品を発表している。

70歳となった今、「京都が『終の棲家』との思いで、自分のスタイルでこれからも美人画を表現していきたい」と話す。

チャリティー美術展には、これまで15年にわたって作品を寄贈してきた。

「自分自身は描いている時がいちばん落ち着く。作品から、やすらぎと心の平安を感じ取ってもらえれば」

同美術展には、書画や工芸、宗教家の揮毫など多彩な分野の作家の作品も並ぶ。

京都を終の棲家に、美人画を描く思いを語る鶴田一郎さん（京都市下京区）

平安の心 響き合う社会に
幼い頃の気持ちに戻って

絵画、陶芸…善意千点超

「それぞれの魅力と個性を、地域福祉や美術の分野を超えてさまざまな方々に触れていただける貴重な機会」と鶴田さんは話す。

「人の喜びや救いへ思いをはせる平安の心が響き合い、社会全体へと広がってほしい」と願っている。

イラストレーターで絵本作家の永田萌さんは、美しい色彩から生み出す独自の「花と妖精」の世界が広く知られる。作品を一環して貫くのは「童心」だ。

公園から子どもの歓声が響くことを、こどもみらい館で話す永田萌さん（京都市中京区）

百貨店を会場にしたチャリティー美術展には、永田さんの作品を目指す熱心なファンだけでなく、より幅広い層が来場する。

「私の名や作品を知らなかった方に見てもらえることこそ、このうえない喜びです。どなたも子どもだった時があるはずです。懐かしいような、ふんわりとやさしい気持ちに戻っていただけるなら、作者にとっては望外の幸せです」と永田さんは話す。

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館（京都市中京区）の館長を務める。

京都新聞の福祉面に寄稿する随筆では、みらい館に隣接する公園で遊ぶこどもや子育てする若い親と接したエピソードをいきいきとつづっている。

みらい館の前身は明治初頭に創設された伝統ある番組小学校だということも、随筆で記した。

少子化による学校統廃合やコロナ禍など社会環境の激変も経た。

「先人は、社会の未来と夢を子どもたちのすこやかな成長に託しました。その願いは、今こうして子どもの歓声が響く姿を目にすれば、きっと喜んでいただけるでしょう」

23日まで。無料。

◆第４２回京都新聞チャリティー美術作品展「作品お渡し会」

２０２５年1月１２日（土）、１３日（日）両日に京都新聞文化ホールにて、第４２回京都新聞チャリティー美術作品展で落札された作品を引き渡す「お渡し会」を開きました。作品一点一点の点検後、丁寧に梱包して、落札者に作品の引き渡しを行いました。